

渡辺貞夫

Watanabe Sadao

Text / Kazune Hayata Photo / Ko Hosokawa

終戦後、明るい音楽が流れ夢中で聴いた。
2年間だけのつもりが、
東京で音楽をやっていくと決めた。



飛び切りの笑顔とエネルギーに満ち溢れた人だ。世界中で展開されている躍動的な音楽は、その優しい笑顔と共に聴く者をいつも喜びで満たしてくる。近年では、そうした精神的な演奏活動に加えて、次世代の育成にも積極的に取り組んでいる。82歳になった今も第一線で活躍し続けるアルト・サクソ奏者、渡辺貞夫。その音楽にかける思いとパワーはどこから来るのだろうか。

宇都宮の小さな楽器屋に
1本だけポツンと置いてあった
中古のクラリネット

——どのようにしてジャズに出会われたのでしょうか？

僕は13歳の時に終戦を迎えましたが、それまで日本に流れていたのは流行歌、唱歌、軍歌のようなものばかり。華やかな音楽はまったくありませんでした。戦争が終わると同時にアメリカのポピュラー音楽、ハワイアン、ラテン、ジャズのような明るい音楽が流れるようになって、それらを夢中になって聴き始めました。そんな時にビング・クロスビーが主演する「ブルースの誕生」という映画に出会ったんです。その中に10歳くらいの少年がカッコいいクラリネット・ソロを演奏する印象的なシーンがありましたね。その少年に憧れたのがきっかけです。

——すぐに演奏されるようになったのでしょうか？

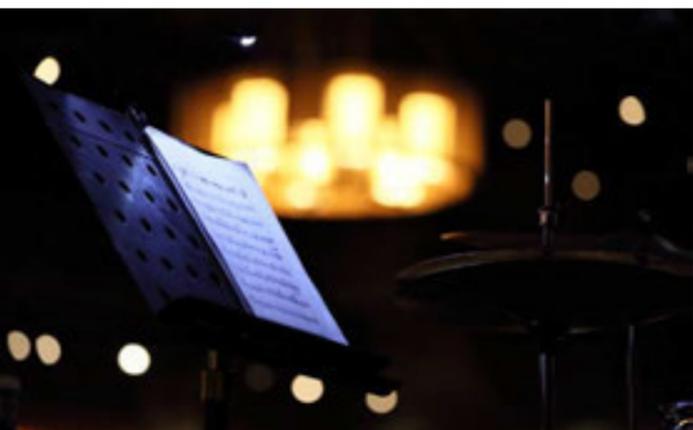
15歳の時に宇都宮の小さな楽器屋に1本だけポツンと置いてある中古のクラリネットにたまたま出会いました。それが3000円という値段だったので、これなら買ってもらえるかもしれないと思って親父にしつこくねだりました。ポディがドイツで、ベルがアメリカ、樽とマウスピースが日本製という継ぎはぎだらけのひどいクラリネットでした。昔、無声映画のバックでクラリネットを吹いていたという近所の駄菓子屋の親父さんに1回10円ずつ

払って店先で3日間教えてもらいました。それが始まりです。その数か月後には宇都宮のダンスホールなどで演奏し始めていました。

——それはまだ早いふん早いスタートで、そうですね。当時は、楽器を持っていけば仕事もらえるような時代でしたから。そうこうするうちに鬼怒川のホテルで進駐軍向けに演奏する仕事が入りました。ところが当時、米軍が関係する場所で演奏するには特別調達庁というところが発行するライセンスを持っていないと駄目だったんです。よってスペシャルAからDまでランクが決められるんですが、僕達のバンドは最初、下手過ぎてランクが付けられないと言われましてね(笑)。もうすでに仕事が入っているからと言って頼み込んだら、特別にDの下のEクラスというライセンスをもらいました。高校を卒業した2週間後には上京してアルト・サクソも吹いていました。親父には2年間くれと。2年間だけ東京で好きなことをやらせてくれ。そうしたら帰って来て親父のやっている電気屋を継ぐからって。

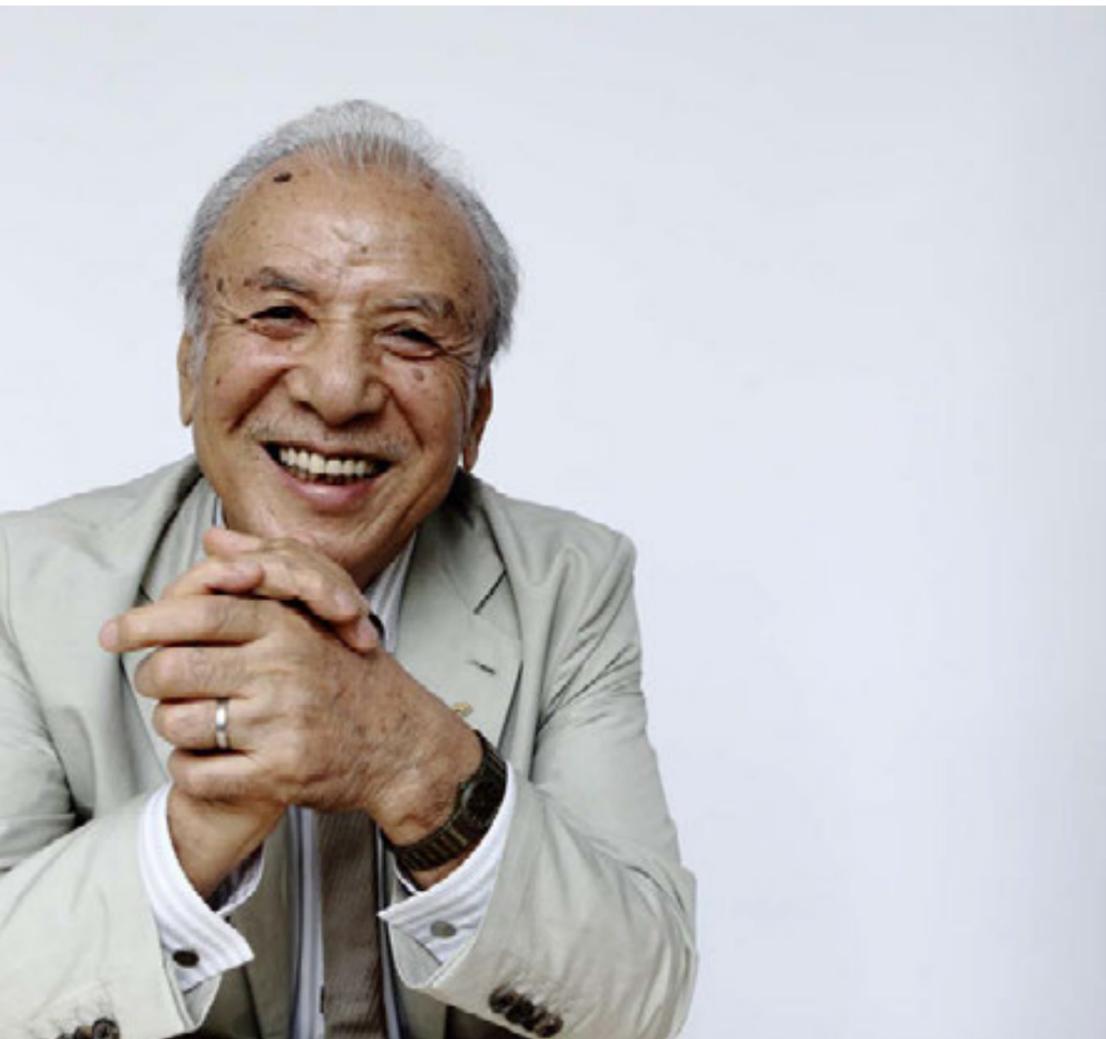
——それが2年では済まなくなっただけですね。

2年のはずがこんなに長くなっちゃいました(笑)。19歳の時に先輩のピアニストである穂吉敏子さんに声を掛けていただき、ミュージシャンでやっていくという決心を固めました。僕は正式な音楽教育は受けていませんでしたから、ミュージシャンとして生きていくのかどうか自信を持つことができなかったんです。その僕に、穂吉さんが新しいバンドを作るので入らないかと声を掛けてくれました。本当に飛び上がるほど嬉しかったです。当時、最も前衛的な音楽であるビバップ・スタイルのジャズをしっかりと演奏していたのは守安祥太郎さんと穂吉さんのふたりだけでしたから。その穂吉さんに認めてもらえたということで、これなら



プレイをしている時の

思いが伝わる音が理想の音



音楽でやっていけるんじゃないかと。

世界の子供たちが音楽で
交流できる場を作りたい

——その後、アメリカのバークリー音楽院へ留学され、帰国後はジャズだけでなく、ブラジル音楽やアフリカ音楽なども取り入れたワン・アンド・オンの音楽を築き上げられました。

初めてボサノヴァに出会ったのは、バークリー留学中にゲイリー・マクファーランドというヴィブラフォン奏者のツアーに参加した時です。最初にボサノヴァを演奏した時は、何だかゆるい音楽だなという印象だったんですね。でもその音楽を聴き、演奏するうちに次第に魅かれていきました。この音楽には人の心を癒す独特の歌の世界があるんですよ。アフリカへ初めて行ったのは1972年。テレビのレポーターとしてケニヤに出掛けました。アフリカはジャズの故郷だと聞いていたので、ずっと憧れていました。だからテレビ局から声を掛けられた時は飛びつくようにOKしました。ナイロビの空港から外に出た瞬間からアフリカの風土と人々の魅力に心を奪われました。どこにいても、シンプルで生きた音が聞こえてくる土地。仕事しながらでも歌があるし、学校の行き帰りにも歌がある。とても新鮮でした。ある日、移動中にサバンナで車を止めて一服していたんですが、その時、最初何の音もしなかったその場所に風が吹いてきて、鳥の音が遠くから聞こえてきて、久しぶりに自然を、そして風を感じました。それまで出会うことのなかったダイナミックな自然、そしてオープンな人々。音楽を求めていっばいになっていた気持ちが楽になって、すっかりアフリカにはまってしまいました。

——そうして世界を回られた渡辺さんは、子供たちへの指導も熱心になさっていますね。

1970年代後半にブラジルを1か

月旅したのがきっかけです。バイヤ州のサルバドルでオロドゥンという素晴らしいサンバチームに出会ったんです。

シンプルだけれどもすごくダイナミックなリズム。こういう音楽を日本の子供たちに体験させたいと長い間思っていたところ、NHKなどの協力もあって1995年に栃木県で開催される国民文化祭で行うことになりました。栃木県に毎週出掛けて子供たちと練習して1年かけて準備しました。そうして行った演奏の評判が非常によくて、1回で終わらせるのは勿体ないということになり、今年で20年になります。

——まだに続いています。2005年の愛知万博では、僕が前から抱いていた、世界の子供たちが音楽で交流できる場が作れたらいいなという思いを、五大大陸の各国から集まった400人の子供たちの手で実現させることができました。お陰さまでこれも非常に評判がよく、あちこちの国から声を掛けていただけるようになりました。

僕の追い求める音に
また一歩近づけた

——長年、音楽と深く関わっていらっしやる渡辺さんにとっての理想の音とはどのようなものでしょうか？

自分の思いが伝えられる音ですね。理想の音って人それぞれだと思うんですが、僕にとっては自分がプレイをしている時の思いが伝わる音が理想の音です。だから必ずしも綺麗な音を求めているというわけでもないんです。僕のテイストの音を求めているわけです。僕は十数年前から現在のセルマー・スターリングシルヴァーという楽器を使っています、この楽器を演奏しながらその音を掴もうとしています。先週ブラジルでニューアルバムを録音してきました。僕ですが、僕の追い求める音にまた一歩近づけたように思います。

——そのセルマー・スターリングシルヴァーですが、吹きこなすのが大変な

楽器と何っています。

——しんどい楽器ですよ。僕は1960年代後半から、手ごたえのある楽器ばかりを使ってきましたけれど、その中でも一番しんどい楽器です。手ごたえがちょっとあり過ぎるほどなんです。手ごたえがない楽器はつまらないですからね。でもその分、柔らかくふくよかな音を遠くまで運ぶことのできる楽器です。僕にとっては音が命ですから、毎回しんどいなと思いつつも付

き合っています。しょうがないですね。惚れた弱みです(笑)。以前の楽器に戻そうか、そうしたらずいぶん楽になるだろうなって思うこともあるんですが、それでもいざ仕事になるとこの楽器を選んじやう。

——渡辺さんは今でも精力的にライブやツアーを行っていらつしやいます。ご苦労などはありませんか。

いやあ、ちつとも大変じゃないですよ。行きたくて行くわけですから(笑)。プレイを続けていくためには常に自分のコンディションをキープしてないといけません。しばらく楽器に触れていないと不安になりますし、調子が出るまでに時間もかかります。毎月スケジュールが入っていると、ライブという真剣勝負の中で楽器に触れていることができずからね。ありがたいことです。ですからお正月以外はほぼ毎月ツアーに出ていますし、必ず何かやっています。現在は、10月にニューアルバムがリリースされるので、その準備をしているところ。その他にも、毎年やっているクラブ・イベントやクリスマス・コンサートなどの企画を進めています。もう再来年の分まで考えていますよ。僕はせっかちなもので(笑)。楽しみにしててください。

PROFILE 1933年東京都生まれ。18歳で上京と同時にプロ活動開始。1962年に米国バークリー音楽院に留学。1965年の帰国以来、長年にわたって日本のジャズ界をリード。70枚を超すアルバムを発表。近年では、栃木県の中学生への音楽教育活動や、世界各国の子供たちの音楽交流を実現させた愛知万博・政府出展事業の総合監督など、次世代の育成にも熱心に取り組んでいる。1995年に紫綬褒章、2005年に旭日小綬章を受章。



ロングインタビュー

渡辺貞夫